
透明人間

二姫諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明人間

【ZPDF】

Z0307D

【作者名】

一姫諒

【あらすじ】

特に何も無くそのまま終わると思いますが、本当に何も無かったかを考えるのは難しいし、あつたからといってそれがはたして価値なのかという話です。

定期的に心地よいリズムを響かせるレールの音は、かまびすしい雑踏とは一味違う。

乗つてよかつたな、と思つた。この車両には僕以外誰もいない。

外は今日もうだるような暑さである。窓の外の景色が、手垢のついた一枚の長い絵のようにスクリールされてゆく。

その日を食うにも困る浮浪者がまったく醉狂なものだなあ、と僕は少しばかり自嘲的な笑いを浮かべた。

この旅には目的地はあるけれど、目的は無い。

つい先日のことだ。いつものように煙草錢を稼ぐため、ほつぼうでかき集めた古書 専門書の類である を

古本屋に売る、といつと予想できぬほど高値が付いた。

おそらく希少価値のある本が含まれていた。運が良かつた。

まれに見るまとまつた収入が入つた僕は、今こそ好機と胸をみなぎらせ、前々から計画していた列車での旅を実行に移した。

とにかく遠い場所に行ければいい。昔から僕は、知らない街をやみくもに歩いて回るという奇妙な趣味を持っていた。

知らない場所を歩くだけで、僕はもうわくわくするのだ。

無責任に期待を膨らませ列車に揺られた。しばらく景色を楽しんだあと、

ホームレスのアイデンティティである（諸説あり）おおきなボストンバッグから、

自分であらかじめ作つておいたおむすびと、列車に乗り込む前に買っておいたチーズ、そして安物の焼酎を取り出した。

チーズをちいさく千切り、おむすびの上に乗つける。飾り気は大事だ。

およそ色彩感覚とは無縁だが、うまい具合に「メニューでせてちょうつとうれしくなつた。

缶のふたを開け、焼酎を煽るとたちこに氣分になる。足を伸ばしてくつねぐ。

さながら独裁者のよつな氣分だ。

独裁者ともなると、他者を気にかける余裕を持たなければならぬ。

僕がこの旅をしていくあいだ、ねぐらを任せているひげづらの男の顔が浮かんだ。

いたずら好きなそのおやじは、箱前を小野田畠平といつ。

彼も僕と同じで、自分で言つのもおかしいけれど、ホームレスとは思えないほど生き生きとした男だ。

ひょっとしたら僕をびっくりさせようと、テントになにか細工をしているかもしない。

以前、少し遠出して、2日間ほどねぐらを空ける事があった。僕が夕方に帰るとすでに

自分のテントが張られていた。今日あたり帰ってくると黙つて張つていやつたぞー、と小野田が言つので、

感謝してテントに入ると、ビ真ん中に落とし穴が掘られていてもの見事に落ちた。

……帰つたら用心しないといけない。

そんなことを考えてこらへり、アルコールのせいか眠くなつてきた……

このまま、少し寝てしまおうか……

……。

……

「…………のー、す……せーん」

「す……せーん！ お姫…………んー……」

…………ん？

…………なんだ？ 誰だ？

「す……ん！ お姫さんー！」

…………お姫さんよ…………中身が出るんだり…………

…………丑ねえよ。なんのこいつか。さけひ

…………いけない、寝惚けてこる。

…………どうやら寝入つていたらしい。誰かが呼んでいる。

「お姫さんーーー！」

…………その一晩で完全に田を覚ます。

「はー…………？ 何でしちつか？」

田の前に立っていたのは車掌だった。偉そつだし、ヒゲがつっこ正在からたぶん車掌だ。

僕は頭を軽く左右に振り、田をこすりつけて車掌を見据える。

「あの、乗車券を拝見させてもうれますか？」

ああ、そういうことか。確かに切符は財布の中に入れたらはずだ。

シートに置かれた荷物の隙間に手を突っ込む。

。

あれ？

。

え？

。

ない。

。

「……はいー！ あの、財布無いだよー？」

寝起きで動転した。といつか財布もない。

「……財布を失くされたんですか？」

「いえいえ、違うんです！ 僕はこの列車に乗ってるわけだし、当然、切符を買うときまではあつたんです！」

焦つて余計な補足説明を加える。べつに悪いことじゃないのに、僕。僕は半狂乱になつて列車の床と天井を必死に指差した。もちろん行為 자체に深い意味は無い。

「では、駅で落としてしまわれたとか……」

「いえ、ここで切符を財布の中に入れたらんです。こんな感じに」

頭のてっぺんからつま先まで、当時を完全に再現しようとねじねじした動作で演技する。

それは実際のところ驚異的に似ていたのだけど、車掌は一瞥すると皿をそらした。

「それでは、この車内に……」

車掌は、無視したわりにはかなり一生懸命に探してくれている。

適当な対応をしたら後々めんどくさいことになつそうな客だと思われているんだろうか。

ああ、わざとまでとてもいい気分だったのに……。まったくついてない。

僕も必死に探す。

……ないな。もつす」し別の場所を探してみよ。

「あの、最後に見た記憶は……？」

車掌は僕を追いかけながら尋ねる。

「ええと、ここいら辺に置いたんですよね」

座席シートを叩いて言いつと、車掌の表情がこわばる。

「……盗まれたのでは？」

え？

「最近、列車内での置き引きが多発しております……」

「……えつ」

しばらく言葉を失つた。

……いや、まあ、普通にこの状況を考えればそつなるだらう。

なけなしの金が……………」これからどうしよう。

とりあえず落ち着きを取り戻すべく女の裸体を妄想していると、車掌は、カード類は大丈夫でしょつかと尋ねてきた。

「カードは一枚も入つてないので、大丈夫なんですけど……」

「ああ、やつでしたか。ところでもお姉さん、お姉さんしうつか？」

「こ、え、全く急ごでませんが、何でしょつか」

「ええと、紛失届けの手続きなどあるのですが、私もこの後仕事が
ありますもので……」

なるほど。車掌ならば車内放送とかしなくちゃいけないしね。

鼻声で乗客にお知らせしなくちゃいけないしね。

「こや、でも、落としたんならともかく、盗まれたんならあきらめるしか無いのですよね……」

「一応届け出たお手て續りはしないですよ。後日最寄の駅で駅員に話してもうされば結構ですか」

「せうですね。すみません。何か僕、爆睡してたからなあ

「へいへい、やあひままで行かれますか？」

「終着です」

無意味に畠答してみる。本当せうじでもいんだけれど。

「えいかりお乗つになられましたか？」

僕が答えると車掌は端末にタッチペンを走らせる。紙に向かをパソコン
トアウトする。

「……あれをどうぞ。乗車券の代わりだと想つてください」

手渡された紙を意味もなく穴の開くほど眺めていると

「では、私も仕事がありますので失礼します」

車掌は足早に去つて行つた。

「……あー」

車掌は行つてしまつた。

「……でも紙を見つめる。

やれやれ……到着したら悠々自適とまではいかなくとも、残りの金で少しば贅沢しようと思つていたのに。

このままでは帰りは歩きだ。帰りの電車賃を貸してもおひまつかとも思つたが、僕はふつうの人とは境遇が違う。

なにも僕から盗んでいかなくともいいじゃないか……

ホームグラウンドから遠く離れた場所で僕ひとりか……

いやちがう、みんなでひとりなんだ！

意味不明だった。

.....

「大変でしたね」

え？

僕に言つてるのだろうか？

紙から目を離し、前を見据えると目の前に女の子が居た。

「ここまで至近距離で気づかないと」

女の子は見たといひかなり若い。下手したら10代か。

しかし……

キテレツな髪型してるな。

彼女は、実験に失敗した科学者よろしく四方八方に爆発したようなヘアスタイルをしていた。

この形、どつかで見たことあるな。

…………

……思い出した。

深海生物のセンジュナマコ。

実は僕はディ カバリー チャンネルの番組が大好きで、ホームレスなりにいろいろな手段を講じて視聴してきた。

特に好きなのが深海生物特集。その番組に出てきたちょっとキモい深海生物のセンジュナマコにそっくりだ。

「わたし、新原駅からずっとここに座つてましたけど、誰も来ませんでしたよ？」

「ああ、じゃあその前だったのかな？」

「そんな」とを考えつつも一応返事をする。 そうか、この娘は僕が寝てる間に乗り込んできたのか。

「その前って……乗つてすぐに寝ちゃったんですか？」

「うそ、どうやらうみたいだね。」

「どこまで行くんですか？」

女の子はなにかと聞き返していく。

よく見ると彼女は服装も一風変わっていた。 こうこうの、なんだっけ……ゴスロリとかいったつけ。

なんにしても少し変な奴なのは確かだ。

……自分を度外視できるのは公共から隔離されたホームレスの特権です。

とにかく、適当にあしらうこととした。

「じゃあ、そんなわけで僕はまた寝るから……」

「ねえねえ、お兄さんってもしかして旅人さんですか？」

僕の発言を無視し、嬉々として尋ねてくる。

……なるほど、かつ見えなくも無い。とこつか半分当たりだ。

それで話しかけてきたのか。

よし、なうば興味を削いでいただい。

「ううん。ホームレスだよ」

「いやかに答える。一瞬顔が引きつるのを僕は見逃さなかつた。

ふふん、パンピー。

これでどこかへ行つてくれるはずだと思つた。

しかし僕の予想を裏切り、彼女は一瞬硬直したあと、なにやら納得したような面持ちになつて再び質問攻めを仕掛けてきた。

「へ、へえー、ホームレスさんなんですか。どうして列車に乗つてるんです？ 何か目的があるんですか？」

「いや、それは……」

「普段どうやって生活してるんです？」

な、なぜここんなに必死になつて話しかけてくるんだ？

まるで、僕と打ち解けて行動を共にしたがつてゐるよつな……

ん？ もしかして……

あの声えが浮かんだ。

「あの、 ついにつかれ……」

尋ねてみる。

「君、 家出へ。」

あからざるに顔を背けやがった。

「無視するな。 話を聞け」

「景色を楽しんでるの。 邪魔しないで」

彼女が見ているのは列車の天井だ。

「天井の何を見てるんだ」

「つわの空」

「エリにあるんだ、 そんなもん」

そんな仰角45度ぐらいの空間に何か存在してゐるのか。

そのまま押し黙る。エリから本部に家出しこそ。

「 部屋はなんてこいつの？」

「ひ・み・つ」

うわあ、殴りたい。

「じゃああだ名で呼ぶよ。君のあだ名はジユナだ。」

センジユナママに似てるかい。

「ジユナ……いい響きですねえ」

「スロリなだけに、西洋的な語感が気に入ったのだろうか。

あだ名の由来を知らないジユナは、ぱあ、と花が咲いたように笑顔を浮かべてよろこんでいる。

笑顔がほほえましい。

「お兄さんの名前は何ていうんですか？」

「僕は数値衣杯。『すーちーぱい』って呼んでくれ」

「ウソ……」

なんでバレたんだろう……

「森田尚吾です……すみません。」

軽く余釈しあう。ちなみに今のも偽名だ。

「で」

僕は続ける。

「家出なんだな？」

「……ハイ」

ジュナは白状した。

家出して、心許なくて、一緒に居てくれる人を探してた。そんなありそうであんまり無い話を聞かされる。

「家出なんて今すぐやめて帰れよ」

「……いやです」

「きつと家族は心配してるぞ。それに、世の中には悪い人がいっぱいいるんだ。

僕にも無防備に話しかけてきたけど、ほいほい誰かに着いていくなんて危なすぎる」

一応、説教を垂れる。っていうか、ホームレスだと言っているのに何故ためらわずに取り入ろうとした？

「うん、それは分かってるんだけど……」

ジュナは顔を赤らめ、人差し指同士をくつづけてもじもじしている。え？

なんですかこれ？

フラグ立ちました？

僕がどぎまきしていると、彼女は言葉を続けた。

「サイフを丸出しにして爆睡した拳旬、それを盗まれて大慌てする
ようなドジだから少なくとも悪い人じやないかなあつて」

「うんその通りだお前もうあつち行け」

必死に腰のあたりにすがりついてくるジュナを振り払う。

「もういいから帰れ！ 僕はもう寝るから。」

一喝し、知らん振りをして眼を閉じた。

付き合つてられるか！

彼女はその後もねーねーと体を何度も揺さぶってきたが、とうとう観念したのか自分の座席のほうへ戻つていった。

じぱりくするど、ねやすみなさい……でも着いていきますからね
へ、という彼女のつぶやきが聞こえてきた。

旅の始まりから面倒なものを抱え込んでしまつたらしい。

とにかく彼は良い人そうだ。それに処世術も心得ているだろう。

少なくとも、あたしよりは。

駅前で一人思案する。

もう駅時計は3時を指しているが、まだ日差しが強く汗が吹き出す。

1人でいるのは心細いし、なにより、彼に興味がある。

ただ、少し遠くて知らない町を歩きたかったから？

……なんですか、それ。

しかし彼は大真面目に語った。

本人は気がつかなかつたかもしれないが、相当強い語調で。

（まるで、自分の中の世界が広がつてゆくようだ）

そんなこと、言つてたなあ……

暑い。

とにかく早く見つけ出せねば。

お金は持つてないんだし、そう遠くへは行けないはずだ。

見つけ出したら絶対文句を語りてやる。

かよわい乙女に、こんな心細い思いをさせるなんて！

私は大きく息を吸い込んで叫ぶ
「モニ、なにふりかまうて泣れない」

森田さん

20

僕は蒸し暑い中、これからのことを考えたが、

歩いて帰るのは無謀だし、やはりここで金を稼ぐしか無いようだ。

そのための第一目標。この町のホームレスを探す。

彼等は自分の住む町についてはプロフェッショナルである。様々な情報を得るには不可欠な存在だ。

まず彼等に出会いの必要がある。

そういうわけで今、その目標と、自分の道楽のために僕は町をぶら

ぶらしていた。

十字路が多く、規模は違つが京都のように網田の構造になつている町だとわかつた。

大きな建物は少なく、一軒家とアパートが殆どである。

人はたまにすれ違つ程度で、アスファルトの道路は広く綺麗に舗装されている。

田舎だからか、空氣もおいしいような気がした。空は底抜けに蒼かつた。

やはり知らない町を歩くのは、新鮮だ……

……そういえば。

駅の名前すら確認できなかつたな。

思いながら歩を進める。

終点に到着した僕は、一瞬の隙を突いてジュナを撒いた。

後ろから呼び止める声が聞こえたが猛ダッシュ。

これで彼女もあきらめて家に帰るだろ？

しかしその結果、楽しみの一つだった駅の雰囲気は全く楽しめなか

つた。

駅名すら分からぬ。乗るときは適当にボタンを押しただけだし。切符に書いてある駅名を

見た気もするが、よく覚えてない。到着してのお楽しみぐらいで思つていた。

僕はそういう男なのだ。

ちなみに財布の紛失届けはもちらん出せなかつた。だつて住所も電話番号も無いのだ。どうせ無駄だ。

僕はここに存在するのだが、僕の存在を他人に証明するにはそれ相応の書類が必要なのである。

.....

..... だがそんな不満も、塵芥のように吹き飛ぶ。

至福のひと時だ。

歩いているのは観光地でもなんでもない。ただの町の、ただの道だけれど。

空間を紡ぐよつて歩く。

胸が清涼感で満たされていく。頭の中の世界が拡大してゆく。

この空間は今創られた。少なくとも僕の中では。

この感覚を味わうには、やみくもに遠くに行けばいいと言つ訳ではない。

ある程度、僕の知っている場所と繋がりがなければならぬ。

ただし、隣接していはダメだ。

そこの説明が、難しいのだが……

まあ言語化できるほどばかりじゃないな、世の中は。

たぶん共感出来ない人にとつては、精神異常者だ。

暑い中、金も食べ物もあてもないホームレスが、幸せを噛み締めながら歩いていた。

.....

しかし、あのナマコ女.....

顔は結構かわいかったな。

.....いかんいかん。

ホームレス生活にそういう欲求は厳禁だ。

そんなことこかまけている時間は無い。なに一つもまず食つことが最優先だからだ。

……散策は別です。僕の命だから。

それにカタギの娘さんを傷物にするわけにはいかない。

あのまま一緒に居ればどうなつていったか分かったもんじゃないぞ。僕が。

久しぶりに女と接触したせいか、かなりむらむらした。

下半身の相棒のジョーンが寂しそうだ。

後で奥義「自己完結」を使わざるを得ない。

そんなことを考えながら、僕は見知らぬ町を楽しんで歩いた。

町を分断するように流れている川に沿つて歩く。

その川にかかるつている古びた橋の下に人影が見えた。しめた、と思
い人影の方向に向かう。

果たして、そこには浮浪者と思しき老人がいた。

60歳ぐらいだろうか、白髪で紺のコートを着ている。

周りには寝袋も置いてあり、生活感もあったのでここに住んでいる
のは間違いなかった。

「やあ、じいさんここに住んでるの？」

僕は躊躇無く話しかける。

老人は答えない。予想の範囲内だ。

ふつう、話しかけられてすぐに答える浮浪者というのは少ない。

長年の生活に疲れ、色々なことに興味を示せなくなっているというのもあるし、

からかいの対象となつた経験からといつのもある。

しかし基本的にはどんな人でも根気よく粘れば返事をしてくれる。

僕は川を眺めたり、この老人の生活用品を観察しながら10分ぐら
い周りをうろついてから、

自分もホームレスであることに、今に至る経緯を相手の反応を期待
せず簡単に説明した。

すると洗濯物を干していたじいさんが、それは醉狂なこったな、と
はじめて口を開いてくれた。

やつとしゃべつてくれたので、僕は質問を始める。

「仲間は何人だい

「1人だよ

少し驚いた。

ふつう、ホームレスというのは何人かのグループを組んで生活する。
最低でも2人。

様々な危険があるからだ。とくに若者の襲撃などがあると集団で暴行されたりするので本当にあぶない。

むろん、経験の浅いホームレスが1人で寝ているのはよく見かける。だが目の前の老人はどうみてもベテラン、僕より生活術に長けていそうなくらいだ。

「ここの町には他にホームレスはいないの」

「いや、ここの川の少し上流にも2人いるし、他の場所にも何人かいるな」

「固まつて住めばいいのに。あぶないよ」

「もうこの年だしな。来る物拒まずさ」

じいさんは笑つて言つた。

話すことさえ出来れば、なかなか人当たりのいい人だ。ちょっと妙な表現だが。

そして、切符を買うために金を稼ぎたいから一週間ほどここに居させてくれないかと頼むと

好きにしな、といふ答えが返ってきた。

良かった。思つたよりすんなりと事が運びそうだ。

「それで、季節的にもアルミをやるかと思つただけど、他に誰かやつてる人いるかい」

アルミといつのはアルミ缶を集めてつぶし、換金する仕事のことだ、だいたいキロあたり80円が相場だ。

夏も終わりとはいえたま暑く、飲み物を買う人が多いので他の季節に比べれば格段に空き缶を集めるのが楽なのである。

しかし都心ならともかく、いつこの田舎ではアルミ缶コレーターが存在する。

仕事をダブらせると先にやつていた人の迷惑になるからだ。

「いや、ここの辺つじやいねーな

僕はその答えにまつとした。

そのあと換金所の場所とこの町の地理について少し尋ねてから

「また夜にくるよ

と言い残して僕は散策を続けた。

川の下流に向けて少し歩き路地に入ると、そこには小さな公園があった。

入り口の横のゴミ捨て場には粗大ゴミがうずたかく積み上げられており、その隙間から

「粗大ゴミ捨てるな」の看板が少し覗いていた。

公園を歩くと、思わず幸運があった。500円玉が落ちていたのである。

これで、じいさんにおみやげを貰えるな。

僕はしばらく休んでから公園を出て、少しテンポを上げて歩く。

そうしているうちに、僕好みの、古びたマンションを見つけた。

入り口の着工年を示したプレートを見ると、2012年とある。もう数十年前の建物だ。

遠目ではそこまで古く見えなかつたが、表面の塗装は克明に時を刻んでいた。

まるでここに住人かのようにアパートに入り、コンクリートの階段を上る。

階段は薄暗く、くもの巣が張つていた。最上階までゆっくりと、意

味もなく上る。

「でも、誰かの生活があるんだ。」

こうすることをすると、僕は別の世界を侵略しているような気分になつた。

何の意味も無い行為である。

残念ながら屋上は止かれなかつた。最上階でしあはし外の景色を楽し

胸いっぱいになつた僕はアパートを後にした。

そろそろ戻るつか。帰りにおみやげを買ってこいわ。

「てめえなんぞ、生きてても死んでも社会の『メリット』だらうが！」

!

橋の下に戻ると、黒い服を着た男が怒鳴り声を上げていた。

じいさんは黙つてそれを聞いている。

「不法占拠ですよ？　ふーほーうーせーんーあよー！」

次来るときにはまだここにいやがつたら、てめえの荷物なんぞ全部川に放り投げてやるからなー！」

男は汚い言葉を浴びせると、そのままじいかへ行ってしまった。

僕はじいさんに近寄る。

「ねえ、今の人、この地区的ケースワーカー？」

「……ああ」

じいさんは言葉少なで、いたずらがばれた子供のような表情をしていた。

どうやらじいさんが初めてではなさそうである。とんでもない奴もいたもんだ。

しかし、僕も不快になつたが、じいさんはもつとのはずだ。

僕は今の出来事を気にしていないうちに振舞つた。

「わうだじいさん、酒買つてきたよ。一緒に飲もうよ

僕からの供應の誘いにじいさんはほんのりよつと顔をほころばせた。

「あ、なら良いのがあるぜ」

自分のねぐらから何かを持つてきた。

賞味期限が切れた海苔と、昆布だった。

「不法占拠だから施設に行けといひし、施設に行つたら人がいっぱいだと言われるしよ、
それにつの年だからもう入れないよ」

酒で饒舌になつたじいさんは堰を切つたように話す。

辺りはすっかり暗くなつていて、川の水が月明かりを反射してやさしい光を創つていて。

いろんなことを聞いた。

昔、少し悪さをしたこと。それでも、家族には会えないこと。

じこわんは軽口のよつこつ。

「やつらのやつらのやつも、嫌なやつでよ。今までさうざん嫌がらせを受けたよ」

「ひどいよなあ、ほんと」

確かにここに住むのは不法占拠かもしれないが、追い出さうとするなんて非人道的だ。

「まあ最後に一回ぐらいい、仕返ししてやつと戻つてくるんだがさよ」

「へえ、どんなふうに?」

つとめて明るい口調でたずねた。

「ああ、ホームレスの死体は行政区ごとに処理する担当が変わるからな。この地区の田立つ場所で死んで、やつを困らせてやるよ。まあ、死んだ場合の処理もやつの担当かは知らないけど」

.....。

僕は息が詰まつそうになつた。

「.....家族には会いたいかい？」

じこわんは遠くを見つめる。

「会じてえな。でも、特にせがれからな、もつ会つてくれると言われてるからな。

まあ、おつ死ぬ前にあと一回ぐらじこは会えそうな気がするんだけど

よ

そう言つと黙りこくつてしまつた。よく見ると、じこわんの体は震えていた。

じこわんの住みかから少し離れた別の橋の上で、普段は吸わない煙草を燻らせる。

昼間の暑さはまだいやがらない。かなり涼しい。もう本格的に夏も終わりである。

田舎の夜空は星がきれいだ。

道には人通りが全くなくて、静かな、川の水の流れる音だけが聞こえている。

「ふー」

気分転換にここに来てからすでに30分ぐらいになる。

頭をぐわんぐわんと揺さぶられるようなダウンな気持ちから少しは開放された。

じこせんはもう寝てしまつただろつか……

明日またいつの方角から散策してみよつか……

ほんやうと答えていたとき。

「もつたさあああああああああああああああん……」

「ぐふおあつー!？」

いきなり後ろからタッカルを食らつた。

「じょりでーーー、じょりて居なくなつたんですかああああーーー。」

振り返るとやーーーるのはジユナだった。

「お前、もう帰ったんじゃなか……ぐつ……苦しい……苦しいから腕を放せ……」

「良かったあ……」そのままずっと呟えなかつたらどうしようかと思つてましたよおお……」

ジユナは僕の襟首を両手で掴みながら訴えてくる。とんでもねー力だ。

本気で振りほどけにしてもビクともしないのでかなり焦る。動きを止めるために、

ぶつけたら痛いじゃすまなそな硬くて尖つたものを辺りから探し始めたあたりでジユナは僕を開放してくれた。

命拾いしたな。

僕のほうかもしれないけど。

「もう、ずっと町の中を探し回つてたんですよ！心細いし足は痛いし大変だつたんですから……」

ジユナは一日溜め込んでいた不満をここで消化しきるかのように文句を続ける。

「だから帰れって言ったのに……もう遅いし、ビルで寝る気だよ？

「あ、それなら大丈夫です。あっちのほうで安いホテル借りました」

けろつと言ひ放つ。余裕あんじやねーか。

その後も彼女はぐちぐちと不平をぶつけてくる。

今日はさすがに逃げるわけにはいかない。しかたなく私が悪い「J」ぞ
いましたと平謝りする。

「と・に・か・く・ ちや駄目ですよーー。 明日は絶対に一緒に行きますからね！ 逃げ

なんでそんなに僕にこだわるんだよ……

でもまあ、今は気分的に誰かと居たほうが良いかもしない。

「わかった。僕はこの辺で寝てるから、朝になつたらこの橋で会おう。

その代わり明田になつたらちせんと帰れよ」

「うん！
わかつたわかつた！」

絶対分かつてないジュナが返事をする。なんでそんなに嬉しそうなんだよ……

「いやーここで寝るんですかあ。ホームレスも大変ですねえ」

「……ジユナ」

じにちゃんと話したからだわつか。今日の僕はどうかしている。

こんなことを尋ねてみようと思つなんて。

「ホームレスでいて、一番楽なことって何だと想つ?」

「え、なんだろ?……仕事しなくていいとか?」

近い。

「ちょっと違つ。目的が無いことだよ」

「ああ、自由ですもんね。そのままらしくみたいな」

「じゃあ、ホームレスで一番辛い?って何だと想つ?」

「うーん、冬場の寒さがきつとか、空腹とか?」

「違う」

今度は遠い。

「田的が無いことだよ」

ジユナはきよとんとしている。

僕は夜空を見上げた。気の遠くなるぐらい無数の星々が乱雑に散りばめられている。

人工的なゴール。どこまでいっても人工的なゴールだ。

いやむしろ、ゴールが人工的なのかもしれなかつた。

僕たちホームレスは、ただ普通の人より敏感になつてゐるだけ。

川の流れは相も変わらず、一定の量の水を海へと運んでいく。

その後、今日あつた出来事をお互いに報告してから別れた。

といづか、今日どんなことがあつたのか彼女の方が執拗に聞いてくるので僕がそれに答え、

知りたくも無いのに彼女におきた出来事を事細かに聞かされた。

なんでも草原でヘビに襲われたらしい。どこに行つてたんだよ。

別れる時にも彼女は、明日の朝ですよ、約束ですよ、絶対ですよー、と念を押してきた。

景色にも飽きたので、僕もすぐにじいさんのいる寝床に帰つた。戻るどじいさんは既に寝息を立てていた。

すぐ近くにひびきと横になる。

.....

.....

僕にはわかる。

もし僕が、帰らずにずっとここにいるよ、といつたらじいさんは喜ぶだろう。

笑顔になるだろう。

そして絶対に満たされないだろう。

全部予想がついてしまった。

じいさんは死ぬまで、死ぬのを待ち続ける。

そしてじいさんは死ぬまで、死ぬのを待ち続ける。

僕は眠りにつく。夜風の涼しい、心地の良い夜だった。

次の日の朝。田を覚ますとカタツムリが顔の近くまでにじり寄つてきていたので、

おもわず裏拳で殻ごと粉碎してしまった。

ぐんによりとなつたなめくじに塩をかけてしばし楽しんではいるが、じこわんもむくつと体を起こした。

「ああ、まだ居たのか」

一週間ほど前に居たとこいつ話をしたのに、さも意外かのよつこ言つた。

僕は微笑した。

じいさんは欠伸をすると、顔を洗うのだろう、川のほうへ歩き出した。

川の水は綺麗で飲むこともできるといつので僕もそれに倣つ。

なるほど水は川底が見えるほど透き通っていた。さすが田舎である。

二人並んでバシャバシャと顔を洗う。冷たい水が心地よく、うがいをしようと口に水を含んだ。

「ところで、昨晩の娘は彼女かい」

「グオホアツ……」

鼻と口から盛大に水を噴出する。

「……見てた？」

やばい。

別にジユナと一緒にいる所を見られるのは構わないが、昨晩の青臭い発言の数々を思い出す。

とくに、ホームレスにとつて〜のくだりは同業者に聞かれたら恥死なのだ。

恥死とは恥ずかしくて死ぬ」とである。僕が今作った。

ちなみに「ちし」と読む。10回連続で言えたら大したものだ。

「なんだ、ほんとに女と会つてたのかよ。初めての町だらつこ、手が早えなあ」

……いろんな力マカに引っかかるときは。

アレを聞かれていないのであれば後の誤解はどうでも良かったのだが、一応論駁する。

「いや、やつこのじやないんだよ」

「別に隠さなくたつていいじやねえかよ、兄ちゃん、男前だもんな

べつだん興味も無いようなので、それ以上は何も言わなかった。

まあでも、良かつた。冗談が口を付くあたり、昨日を引きずつていないうようである。

僕も、じいさんも。

今日も良い天気だった。

朝食も無いので川の水を「ゴクゴクと飲み、橋の下に戻る。

じいさんは一息つくと、荷物をまとめました。ゴネで清掃業の仕事があるところ。

僕も自分の荷物を置いた場所に腰を下ろす。と、もつ一匹なめくじを発見した。

つつにたり、こねぐり回したりしてなめくじを困らせる。

さて、僕も仕事に行く準備をしなければならない。

切符代もさうだが、とりあえずは食事のために。さすがに一日一食は食わないときつい。

毎週日曜日にはこの町にある教会がすぐ近くの広場で炊き出しをして、食べ物を振る舞ってくれるのだそうだが、

不幸なことに今日は月曜日である。

それに、じつじつ田舎町ではファーストフードの廃棄処分なども期待できない上、

地区担当のケースワーカーがあんな男では役所のパン券には頼れないし、頼りたくも無い。

じいさんに迷惑をかけるわけにもいかない。

だから、とりあえず食料の調達は急務である。なるべく早く金を手に入れたい。

で、アルミニの換金所なのだが、じいさんの話によると隣町にしかない。

この町にはアルミニを生業としているホームレスはいないそうだし、あまりニーズもないのだろう。

歩いて1時間以上かかるらしく、缶を何キロも持つてそこまで行くのはきついなと思っていたのだが、

おれは使わないから、とじいさんが自分のリアカーを貸してくれた。

重いので自分の荷物はここに置いていくことにし、僕はリアカーを引いてジュナとの待ち合わせ場所へと向かった。

車輪をガラガラと音立てて、ひとつ下流の橋まで行くとすでに人影が見えた。

「森田さん、来てくれたんですねーーー！」

僕の姿を認めると彼女は駆け寄ってきて、嬉しそうにそつとなめくじをこね回した僕の

手をにぎりしめてきた。そういえば手を洗つていなかつた。

僕はといふと、驚いて固まつてしまつていた。

手を握られたからではない。彼女の姿が深海生物から変貌を遂げていたからである。

昨日、千手觀音のようだつた触手は腰までありそつなストレートヘアになつてあり、

つややかな黒髪を風になびかせつてゐる。

服装も違つ。

そでの広いブラウスに、つすい紺のスカートをひらひらさせていた。

太陽の光が純白のブラウスに反射して、一枚の絵のよつと輝く。

清楚です！ 狹つてます！ つて感じのファッショソなのだらうが、ものすじく自然だ。

こちらの方が、昨日のものよりも着慣れているのがわかつた。

昨日の彼女の姿は、家出の時に親への反発で無理に創つたはりぼて
だつたのかもしれない。

……

ちなみに、めちゃくちゃ僕の好みだ。くそう。ガキのくせに……

僕が見惚れていると、彼女はリアカーに興味を示した。

「あれ、なんですかこれ！？　どこで貰つたんですか？」

「昨日あつちの方で知り合つた人から借りたんだよ」

「へえー！　すごいですねえ！　やり手ですねえー！」

「意味分からん」

本当にやり手ならホームレスなぞやつていない。

「まあ、とりあえず駅前に行くぞ」

確か駅前には小さな商店街があつた。まずはあそこからだ。

2人揃つて川沿いを歩き出す。空は青く晴れ渡つていた。

僕はふざけて言った。

「ていうか、わかってるの？お前もうジユナじゃないんだぞ

「え、えっ！？ なんでですかっ！？」

分かるはずもない彼女は困惑した表情を浮かべる。

僕のほうは依然として、「森田」のままだった。

「映画のセットみたいですね……」

ジユナがつぶやくよつと言つた。

駅から一直線に立ち並ぶ商店街。

僕たちはその入り口、駅舎を遠くから真正面に臨む地点に立つていた。

入り口のゲートには「山茶花商店街」と白い文字で書かれた赤い垂れ幕が掛かっており、

通りは夏祭りでもあるのか、はたまた一年中付けたままなのか、ピンクと蒼のあざやかな提灯で飾り付けられていた。

駅舎を最奥にして遠近法の見本のような、見事な情景が広がっている。

だが、僕たちが驚いているのはその美しい町並みに対してだけではない。

個人経営の花屋、魚屋、床屋、八百屋といった店が、今なお生きていた。

店の主たちが「おはよつじやこます」などと声をかけ合いながら、のんびりと開店の準備をしている。

今どき、少し田舎に行つたぐらいではお目にかかるない光景だ。

よく見ると反物屋まである。

「まつたぐ、昨日は損をしたなあ

僕も目の前の風景に釘付けになりながらつぶやく。

昨日はこいつを撒くために必死だったからなあ……

駅を出て即座に右手の道へ逃げ込みジグザグに走った結果、正面の商店街に気付くことが出来なかつた。

「逃げるから悪いんですよつ

「……スマセン

反応を見るに、ジュナも昨日の商店街の存在、少なくとも美しさには気づけなかつたらしい。

しばらくの間、2人でバカみたいに立ちつくしていた

僕たちは商店街を歩きながらアルミ缶を拾つてゆく。

各店舗の店先は掃除しているはずなので、店と店の隙間など細かいところを探す。

「スチールは駄目だからなー」

「はーい」

アルミニウム缶を拾つて金にすると説明した時は怪訝な顔をしていたジュナも、

やり始めるといつた、「あ、いっしょにもあつた」などと言つながら捨つている。

素人にしてはなかなか手際がいい。

僕も少し汗ばみながら、順調に数を集めていった。

横田で、休日を終えたサラリーマンが早足に駅の方へ向かつてゆくのを見る。

商店街の美しさに立ち止まることもできず、決められたルートを進むしかない彼等よりも、

この場で風景を味わい、なおかつ今すぐこの場を立ち去ることもできる僕のほうが上だということは

できないだろ。だが、それでもアルミニウム缶を集め、つぶし、換金し、飯を食らい、その力でまた仕事をするといつ

単純な、生物の一生そのもののように単純なサイクルのほうが、共

時的な喜びにしか価値を見出せない

僕の性に合っていた。社会は、僕が納得するには難しそうだ。

そんなことを考えながら、黙々と拾う。

ジユナはといふと、道端の雑草に隠れていた缶を発見して、なんかうれしそうにしていた。

「そういうえば、朝」はんぱどうしたんですか?」

「川の水を飲んだ」

あ、すんげえ驚いてる。

「か、川の水つて…………大丈夫なんですか?」

「大丈夫だよ、綺麗だつたし」

「綺麗だつたつて…………そういう問題じゃないですよー。」

「え、じゃあどんな問題なの?」

「病原体とか精霊とかいますつて、絶対」

「いや、精霊はどうだろ?…………」

「あたし、少しならお金出せますよ?」

「いや、そういうのはダメだ」

やつこのまダメである。多分。

僕達はアルミニウムを拾いつつ、話しつつ進み、名残惜しい商店街から離れていった。

……駅名を確認するのを忘れた。

「あの、森田さん……」

「ああ……」

わざから氣になっていたのだが、少し離れた電柱からじつとこちらを伺っている男がいる。

商店街からずっと後をつけたままだ。

男はひびひの田線に隠づくと、サッ！と電柱の陰に身を隠した。

「な、なんなんでしょう……」

ジユナはおびえて体を寄せてくる。

しばらく電柱を見据えていると、観念したのか男は姿を現しへりに近づいてきた。

「あのオ、スイマセヨンガア」

男の肌は浅黒く、顔つきも明らかに日本人のそれではなかつた。
ヨレヨレになつた白いTシャツに、カーキ色のチノパンをはいている。

「私、あの、アノ……」

何かを伝えようとしている。

「あの、何か僕たちに用事でもあるんですか?」

「うんん……そう。私日本語分かるよオ」

どうやら日本語が分からないようだ。

「えつと、どちら様でしようか」

「はいイ、私、インド人じやありまセえん

どうやらインド人のようだ。

顔の掘りが深く、鼻が高い。インド北部の出身か?

「迷子になつちゃつたんですかね?」

警戒心が少し薄れたのか、ジュナは僕に話しかけてくる。

「アノ……2日間、私食べれない。仕事、探しゆる

なかなか古典派な外人である。

そして、ただの迷子には見えなかつた。

おそらく不法就労……とにかく関わらぬが吉だ。

「僕達がやつてるのアルミニウムの換金だから、斡旋するような仕事じゃないよ」

「チヨと、チヨッとのお金でいいの。もう私死んじゃう

僕の話が通じていない。

「換金方法も、場所も知らないんじゃないですか？私もよく知りませんし」

男は荷物を何も持つておらず、末期的状況なのだけは分かった。

「ここまで危機的状況なら、役所に行けばいいのだ。

行かないといつことは、お役所に行けない理由があるといつことである。

「つーん、とりあえず警察行こつか

警察、の部分に明らかに反応した。

「ケーサツ、だめ、だめよ。私悪いことしてないよ。」

小学生かい。

まあ、これで事情は大体分かった。

男は働かせてくれ、となおも懇願していく。

うへん……

仕方ない、一回だけ一緒にアルミをやつてやるか。手本を見せてや
れば少しば自分で食いつなげるはずだ。

普通なら、警察に突き出すか、ただ放つておくのだが……

横で田を潤ませている女の子が、それを許してくれそつと無かった。

やれやれ。

5 (後書き)

そろそろ勉強しないと大学に落ちるので、失礼をば。

* そろそろ復活します。 2008/9/2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307d/>

透明人間

2010年10月9日11時33分発行